いずみさの昔と今 第327回

「弥生時代の石製分銅」

1月21日(土)より始まった冬季特別展「大阪の弥生文化－和泉と河内－」では、和泉市の府立弥生文化博物館（3月31日まで施設改修のため休館中）と共同で大阪の弥生文化を幅広く紹介しています。最後の紹介となる今回は、近年明らかになった弥生時代の計量技術に関する資料を取り上げます。

2012年、八尾市、大阪市亀井（かめい）遺跡で天秤（てんびん）のおもりである分銅の存在が明らかになりました。1981年に出土した11点の円筒形の磨製石器の重さ（質量）を量ると、最小のものが8.76gで、これを基準の「1」とすると、ほかがその2、4、8、16、32倍と「×2倍」の重さだったのです。これは弥生時代に天秤を使い、分銅を組み合わせて重さを量っていたことを意味します。分銅の重さは誤差が3％以内で、驚くほどの高い精度を持っていました。亀井遺跡には、同じ重さのものが2つある分銅もあり、もともと2セットあったようです。

この発見で弥生時代の計量基準が明らかになりました。各地の遺跡でそれまで出土していた円筒形石器の重さが再度調べられるようになり、2017年には和泉市・泉大津市池上曽根（いけがみそね）遺跡からも分銅の存在が確認されました。

今回展示する2点の石製分銅は並んで埋められていました。下の円筒形のものは、亀井遺跡の最小値を基準とするとその68倍の重さ、上の石斧形のものは48倍の重さでした。このことから亀井遺跡と同じ質量基準と判断できます。出土したのは集落中心部で、弥生時代最大級の規模である大型掘立柱建物や大型刳り抜き井戸が検出される特別なエリアでした。大切な道具を思いを込めて埋めたのでしょう。

天秤を使った精密な計量はどういう場面で必要だったのでしょうか。2つの意見があります。1つは貴重品の取引きに用いられたというもの、もう一つは材料の調合などのづくりの場で用いられたというものです。

後者では、青銅器生産が思い浮かびます。青銅は銅と錫（すず）の合金で、比率により完成品の性格が大きく変わります。池上曽根遺跡では溶かした青銅を流し込む石製鋳型や材料を溶かす炉に空気を送り込んで温度を上げるための送風管が出土しており、最先端の青銅器生産をおこなっていました。分銅は材料の精密な計量に使っていたのかもしれません。

展示会では、注目の石製分銅に加えて、青銅器生産にかかわる資料も展示します。2000年前の高度な技術にぜひ触れてください。

▶池上曽根遺跡出土石製分銅（弥生時代中期）　提供：和泉市教育委員会

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・北前船文化を巡る⑫

～佐野踊り（佐野くどき）～

「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

▲佐野踊り（佐野くどき）

「佐野踊り」は、口説（くどき）の盆踊りで、江戸時代の佐野町場周辺で踊られていたと言われています。佐野町場は、北前船船主食野家のまちであり、井原西鶴の「日本永代蔵」にも登場するほどの豪商ぶりでした。また、落語の茛の火の主人公としても語り継がれています。

この食野家邸宅（現第一小学校）に紀州の殿様がおいでになられた時、庭先で娘たちに着飾って踊らせ、披露したのがこの佐野くどきの始まりと言われています。この踊りは市内でも長滝、日根野へと広がっていき、隣の貝塚市へも伝わるほど流行しました。特に「月を眺めるようにして、科良く踊れ」という優雅で情緒ある音頭、品のある一種の雅（みやび）さが感じられるのが特徴です。音頭では「食野長者」を代表として、泉佐野の各地の伝承をテーマとしたものが多く、現在は地元の有志でつくられた「佐野踊り保存会」がこの貴重な伝統芸能を継承し、歌い継いでいます。